



# 鄧小平

2007(平成19)年11月17日鑑賞<シネ・ヌーヴォ>

監督=丁蔭楠<sup>ディン・インナン</sup> / 出演=盧奇<sup>ルー・チー</sup> / 王蘇<sup>ワン・スー</sup> (中国映画の全貌2007配給 / 2003年中国映画 / 115分)

……中国の若者たちは毛沢東以上に鄧小平を尊敬しているはず。だって、今日の驚異的な経済成長を実現してくれたのは彼なのだから……。その「公式ドラマ」はこの映画を観れば十分だが、大切なことは自分流の検証。現在そのベストの教科書は、産経新聞の連載「鄧小平秘録——第5部 最高実力者」だと私は考えているが……。

## 🎬公式実録ドラマってナニ……？

鄧小平は1997年2月19日に死亡したが、ネット情報によると、この映画は9年もの年月を費やして製作した「公式実録ドラマ」とのこと。しかし、それってナニ……？ スクリーン上に登場する鄧小平は、顔つきはもちろんズングリむっくりの体形とたく短いクビなどがホンモノとよく似ているものの、彼は俳優の盧奇<sup>ルー・チー</sup>だからドキュメンタリー映画でないことは明らか。夫人の卓琳<sup>ズオ・リン</sup>に扮している王蘇<sup>ワン・スー</sup>も有名な映画俳優とのこと。また、この映画を監督した丁蔭楠<sup>ディン・インナン</sup>は、『孫中山』や『周恩来』などを撮った中国文学芸術界連合会(文連)の丁一嵐副主席とのこと。さらに、この映画は「党中央文献研究室、ラジオ映画テレビ総局、広東省党委宣传部、深圳市党委・市政府が企画したもので、珠江映画制作会社と共同で制作している」とのこと。したがって、そういう総体を称して「公式実録ドラマ」というのだろう。

もちろん日本でも伝記もの映画はたくさんあるが、それはあくまで監督の視点を前面に押し出したもので、いくらNHKがつくった伝記ものであっても「公式」ということはありえない。その点、この映画は中央政府と関係省庁が直接指導することによってつくられたものだから「公式」もいいところ。するとたちまち、この私は興味を

失ってしまうのだが……。

## やはり、公式は面白くない……？

この映画は1976年4月7日の中国共産党中央委員会からスタートする。その後、同年9月9日の毛沢東の死去。4人組失脚という激動の1年を経て、翌1977年7月21日、鄧小平の職務復帰の様子が描かれていく。そしてそれから20年後の1997年に鄧小平が死亡するまでの20年間「4つの近代化」を掲げた彼がいかに科学の振興を重視し、経済政策にウエイトを移した改革開放政策の遂行によっていかに中国人民に奉仕してきたかを礼賛している。つまり、これが公式実録ドラマというわけだ。したがって、面白くないのは当たり前……？

## 演説・講話の巧さ、説得力はさすが

私は鄧小平が直接語っている姿はテレビニュースで何回か観ただけだが、この映画で観る限り鄧小平の演説や講話は巧いし説得力十分。天安門広場で何十万人の人民に語りかける演説は原稿をもっているのかもしれないが、この映画では原稿なしの演説、講話ばかり。同じ日に観た『乳泉村の子』における明鏡法師<sup>ミンチン</sup>の講話も、レジメや原稿など何もなしで、聴衆の目をみながらの直接の語りかけだったが、既に老齢の域に達している鄧小平もそれは同じ。

これに比べると、原稿ばかり読んでいる日本の政治家は何とだらしなことかと思ってしまったのは私だけ……？ また、私は先日『ロースクール研究』（民事法研究会）という雑誌の「オンレコ・オフレコ ロースクールの光と陰」のコーナーに「『落第』講師の遠吠え的総括」と題する小稿を提出したが、それは法科大学院の院生たちの表現能力とりわけ口頭での発表能力の驚くべき劣化を嘆いたもの。西欧諸国は昔からディベートに慣れているが、中国でも鄧小平のような老幹部がここまでしっかり自分の言葉で相手の目をみながらしゃべっていることにビックリ。

## 中国から一番嫌われている新聞は……？

中国から一貫して最も嫌われている日本の新聞は産経新聞……？ それは、「反朝日新聞」とともに「反中国」の姿勢が日本の新聞の中で一番顕著だから……？

その産経新聞では、11月20日から「鄧小平秘録——第5部 最高実力者」の連載が

始まった。この第5部は、1978年9月、鄧小平が「われわれはあまりにも貧しく、立ち遅れている。正直言って、人民に申し訳ない」と語ったことを紹介し、その3カ月後の「年平均9%台半ばの驚異的成長を続ける」起点となった中国共産党第11期中央委員会第3回総会（3中総会）からスタートする。「そこで毛沢東の継続革命路線から、改革・開放と後に呼ばれる近代化路線へ歴史的転換をした」わけだ。

奇しくも、これは映画『鄧小平』が描くのと全く同じスタート点。1978年9月の「北方談話」には、実質的に中国「第二世代」の最高実力者となった鄧小平が改革・開放政策の加速を号令した1992年の「南巡講話」と同じ表現が多数含まれているとのこと。そして1978年当時彼は74歳。さすが3度の失脚を乗り越えた老指導者の面目躍如というところだ。

## 公式ドラマ vs. 産経新聞第5部

この映画は公式ドラマだから、外交面では①訪日（1978年10月22日～29日）、②訪米（1979年1月）、③イギリスのサッチャーとの会談（1982年9月）を中心とした鄧小平の功績を強調している。また内政面では、①「実践派」（是非を事実に基づいて検証する）と「すべて派」（毛沢東路線の堅持を主張する）との理論闘争、②「毛主席の偉大な旗」「4つの基本原則」「安定団結」等の政治理念の確立、③安徽省鳳陽県の小崗村における生産請負制の支持や広東省深圳での経済特区の挑戦、等がすべて鄧小平の手柄であるかのように強調されている。

しかし、産経新聞の「第5部」を読んでこの映画の描き方と比べると、必ずしも鄧小平が進んだ道も順調だったわけではないようだ。考えてみればそれは当然のこと。したがって、この映画が描く公式ドラマをそのまま鵜呑みにするのではなく、自分なりの検証が必要なことは当然。そんな視点をしっかりもってこの映画を鑑賞したいものだ。

2007(平成19)年11月28日記